

浄土

十 月 號

目次

智慧と慈悲……………佐藤賢順(7)

石田一鼎 餞別狀(一)……………吉田絃二郎(13)

芝園雜草……………眞野正順(2)

秋の歌……………中村孝也(4)

父と海龜……………村田嘉久子(10)

葬式つれづれ……………竹中信常(10)

芝園だより……………(16)



芝園雜草

眞野正順

病後ながい間、芝公園の叢のなかを杖をひいて散歩するのは私の日々の習慣になつてゐる。

十年の歳月は、けつして短いものではないけれども、そのあいだにこの芝山内がうけた變化の跡は、また甚しいものであつた。あの晝なほ暗い老樹の間から靈廟の金彩が寂かにまたゝいていた幽邃さも、いまは遠いむかしの夢である。戦のはじめ頃から開始された軍官民かわるがわるの亂暴きわまる伐採、それに續くでらめな堀鑿、開墾、そして遂に戦火の雨が、數多い靈廟を一も残さず拭ひ去ると共に、あとは手のつけやうもない荒廢に、全山は滿目荒涼として野草のなびく禿山に化してしまつた。

——こゝにもまた、舊日本の運命の小さな縮圖が見られるのである。

○

もう今は昔の歩道さへまつたく雜草にとざされて、このごろの朝なぞ、わずかに残る細い道をかき分けて上つてゆけば、膝から下はびつしりと草の露に濡れてしまふ。

そういう叢の中にも、ところどころ靈廟の石柵が残つて白く

ならび、そのあたりの草の下には敷石が長くのび、それに沿ふて巨大な石塔籠の數がいくつもいくつも、あたかも死せる鎧武者のごとく佇立している。これらはいづれも當時諸侯の献上物であつてその人丈けの倍もある巨い胴の背後には、それぞれ嚴めしい肩書の、國守の名が黒く刻まれてある。

このあたりは、つい先頃まではみだりに人の近づくを許さない區域であつた。まして溯つて幕府權勢の下では、死を以て脅かされる禁斷の地であつて、一國一城の諸侯といへども、その祿高に應じて近接しうる限度がさだめられ、萬石にしてわづかにその庇の前に立つを許されたといふ。

このおそるべき權勢によつて護られた禁制の地に、當時宇内の國力をつくし、人工の精を集めて崇麗なる廟が故將軍のために築かれ、その神聖と壯嚴さは萬世かわることなく永久につゞくと信ぜられたに相違ない。

それゆえ身まかつて後、かゝる安らげき聖域に骸をうつすのであるならば、あらためて遠く西方に淨土を求めて去る必要もないと思はれたであらう。すなわち、王者の權は、わが永遠の來世をもこの地上の中にひきよせ得たと思つた事であらう。

——しかし、今は、その最後の靈棺の跡と思はるゝ石さへ見るかげもなくうち砕かれて、草の中に散亂し、心なき人々の踏むにまかせているものである。

○

思ひ出すと、もう十數年の昔にならうか。小石川傳通院で、尾州徳川侯がその墓所のいくつかを發掘して郷里にうつすことになつた。その日、人夫等が群れて巨大な墓碑をとり崩し、やがて、眞土の下を深く堀りさげてゆくと、地中から一枚の大きな平石が現はれてきた。見ると何やら文字の痕らしいものが認められるので、土を拂つてよく檢べると、全部平假名で次の文字が刻まれていた。

「このしたにはかあり

あはれみてほるべからず」

○

「治にいて亂をわすれず」といふか、常に亡びの前にわが身を見、わが事業を見るのが、古い東洋のたしなみの一つである。

この墓の主はおそらく當時將軍の親藩として權勢ならびなき榮華の中に生を畢えた人であつたに相違ない。しかしそのさ中にあつても、なほ、やがて何物の上にも來らずにはおかぬ無常の風が、この墓石をも決して除外しないことを思ひ、この嚴めしく組まれた墓石が、文字なき人々の手によつて露かれる日あるを思ふて、わざとこの平易な假名文字をえらんだのであらう。

「あはれみてほるべからず」

その高雅なる諦めの中にも、やるせなき哀愁のひびきの感せしめるのは、また人の情であらう。

「すべては、うつりゆく」これは地上の鐵則である。移りゆくものは「うつり行くがごとく生きねばならぬ。」しかし、また、それを移りゆかざるものゝ如く見んとするのが人の情である。

ことに、わが目前に幸福をもつ者においてこの情は強い。いま持つよき狀況をいつまでも保持したいのは自然の情であるけれども、これを固執することによつて、かへつて轉覆し自らを傷ける。また、不幸を目前にもつものとても同様である。目前にわが運命がはたと閉されたのに絶望して、背後に他の一つの扉が開かれて來たのに氣がつかず、絶望のまゝに自己の將來を殺してしまふ。

○

無量壽經に、次の句がある。

「すべてのものは、夢のごとし、幻のごとし、響きのごとしと覺りつゝ、なほ、多くの美しき理想を遂げ、淨き國土をつくりてやまず」

「ほろび」の上に事業を見「死」の上に自己を見るのは眞實の眼である。人は必ず死し、事業は、かならず變化するからである。かゝる無慈悲な、のつびきならぬ現實の認識の上に、かたく築かれた人生でなければ危い。眞實でないからである。



秋 の

歌

中 村 孝 也

果てもなく澄みわたる大空の
下に小さきわがすがたかな

孝

毎年秋になると、自分の小さいことが、今更のやうに、
しみく／＼と身に沁む。

永祿八年の秋であつた。彼は數奇なる運命を一葉の扁
舟に託して、夜半人知れず、琵琶湖の浪を漕ぎ分けつゝ
北へ北へと急いだ。浪はひた／＼と舷をうつ。風は冷た
い。星の影もまばらだ。

江湖に落魄して暗に愁を結ぶ

孤舟一夜思ひ悠々たり

天公も亦我が生を慰むるや否や

月は白し蘆花淺水の秋

この時ほど、自分の身の小さいことに氣がついたことは、
後の征夷大將軍足利義昭、六十一年の生涯を通じて、た
つた一度の経験であつたかも知れない。

若き將軍實朝もまた寂しい人であつた。

昔おもふ秋の寢覺めの床の上に

ほのかにかよふ峯の松風

彼には母がある。しかし信賴の出来る母ではない。叔
父がある。北條右京兆義時、それは恐るべき冷血兒であ
る。「初めから、酔ふまい／＼と用心して、絶えず酒毒
を解する藥を離さぬ」大江廣元のごときは相手にならな
い。兄はあつたが非命に斃れた。ひとりの甥は油斷のな
らぬ男だ。前後左右を見廻しても、腹心を打明けるもの
が居ない。大天大地の間、形影自ら相憫れむばかりだ。
「うつゝとも夢とも知らぬ世にしあれば、有りとして有り
と頼むべきかは」。孤獨感が犇々と迫つて来る。唐舟を大
海原に浮べて、浮世を逃避しようといふ願も敗れた。
枕に通ふ颯々たる秋風、咽ぶものは峯の松が枝ばかり
でない。

「今日はよく御精^{ごせい}が出ますのね。」

蜚^{きりぎりす}は挨拶した。爽かな秋日和だ。

「おや、お珍らしい。しかしあなた様は—

眞黒に日に焼けた蟻は不圖口をつぐんだ。

色艶が悪い。羽織が綻びてゐる。

聲が嘎れてゐる。樂器の絃も切れてゐるではないか。

しかし彼女は嬉しさうだ。

「お暇乞に参りましたのよ。夏の中は楽しかつたわね」

あなた方にも、よく聽いて戴きましたのね。」

「お連れさまは?。」

「いゝえ獨りですの。」

獨り來てひとり往くべき世の中に

人の子の肩手を觸れて見し

木の葉ですら、一枚々々、

それ／＼に散りゆくではありませんか。」

彼女は嬉しさうだ。諦^{あきら}めか、悟りか。

あきらめと悟りは同じ國の子か

手を取りあひて秋の野をゆく

孝

○

秋のきり／＼すと言へば、弱々しく衰へてゆくものの表
象として扱はれてゐる。

きり／＼す夜さむに秋のなるまゝに

弱るか聲の遠ざかりゆく

政治家

「秋の末つ方になりて出でにけり。ある山かげの埴生の
小屋にとゞまりたりけるに、閨の秋風身に沁み、きり／＼

すの聲よわりゆくも哀れに覺えて」といふ詞書がある。

但、このきり／＼すは世にいふ蟋蟀^{こほろぎ}のことだ。一つゞれさ

せとは、人のために夜寒を教へし」と也有は記した。

白髪ぬく枕の下やきり／＼す 芭蕉

人生行路も終點に近い。同病相憐む

無残やな兜の下のきり／＼す 同

それも流轉の姿だ

きり／＼す鳴くや夜寒の芋俵 許六

明日の朝はどこで目に觸れるであらうか。せめて今宵だ

けは、無事で居れよ。

きり／＼す自在をのぼる夜寒かな 蕪村

不憫だ。餘り強く焚き過ぎるな。聲も出ないらしい。

○

泣くものは蜚ばかりでない。秋風ばかりでない。雁も

泣く。大空をどこまで何を尋ねてゆくのか。渡り鳥は皆

みな、山のあなたの空遠く、棲むと傳へられる「幸福」

の夢を求めて泣きながら飛んでゆくのである。水も浙瀝

の音をたてて流れてゆく。秋は哲人の悟るべき時だ。そ

して詩人の泣くべき時だ。

泣いて泣いて泣き盡したならば、どのやうなものであらうか。それが思ふまゝに泣けないところに浮世がある。

泣いては不可^いないと誰が言ひはじめたのだ。秋風ですらも、切々の思ひを忍び泣くではないか。

子供は泣く。全心全靈を傾けつくして泣き抜いた揚句母の懷に抱かれてすや／＼と眠る。その眠の甘く安らげきことよ。

羨ましい。大人は何故泣けぬか。全心全靈を傾けて、大天大地の間に號泣して見たい。その上で、大慈大悲の御佛の懷に抱かれて、すや／＼と甘く快き眠に陥りたい。泣くことが足りない故に、熟睡が出来ないのだ。秋風すらも切々の音をたてて咽び泣くではないか。

○

江上に月が白い。楓葉秋花秋瑟々。舉^{ガテラ}酒欲^{スレドモ}飲無^{マントシ}二管

絃、

忽ち聞く水上琵琶の聲

主人歸るを忘れ客發せず

聲を尋ね闇に問ふ弾く者は誰ぞ

琵琶聲停んで語らんと欲する遅し

船を移して相近づき邀へて相見る

淡い情緒がゆるやかに流れる。潯陽江のほとり墨畫のや

うな風情だ。「●」は琵琶を抱いて半ば面を遮る。軸を轉じ絃を撥する兩三聲、未だ曲調を成さずして先づ情有り、絃々掩抑聲々思ふ」。雲が動く。月は半面を照らす。白い顔が浮ぶ。美しい眉だ。遠くで五位鶯が啼いた。白樂天は音樂描寫に懸命の努力を傾けざるを得ない。

大絃嘈々如^ニ急雨　小絃切々如^ニ私語

嘈々切々錯雜彈　大珠小珠落^ニ玉盤

間々鶯語花底滑　幽咽泉流水下^ニ灘

水泉冷澁絃凝絕　凝絕不^レ通聲漸歇

別有^ニ幽愁闇恨生　此時無^レ聲勝^レ有^レ聲

此時聲無きは聲有るに勝る。瞬間突如として曲調が轉ずる。「銀餅乍破水漿迸、鐵騎突出刀鎗鳴」、と思ふと「曲終り撥を收め心に當てて盡く。四絃一聲帛を裂くが如し」。筆者の描寫も旨いが、演奏者も妙手だ。「東船西舫悄として聲無く」、たゞ江心に秋月の白いのを見るだけであつた。

この美人、身の上話を聴けば薄命の連續、「もう一曲を御耳に入れませう」と奏でる聲、「滿座重ねて聞いて皆泛を掩ふ」た。

秋は寂しい。江上一葉の扁舟、月下に琵琶を弾いた佳人も、亦小なる自分を悲しむ一人であつた。

智慧と慈悲

佐藤賢順

本堂の正面に安置された尊像を拜すると、本尊阿彌陀如來を挾んで、向つて右に蓮台を捧げた觀音菩薩、左に固く合掌した勢至菩薩が侍立しています。これを阿彌陀三尊といいます。これは、觀音菩薩は慈悲を象徵し、勢至菩薩は智慧を表現して、この智慧と慈悲とが如來において一體であること、佛は悲智圓滿であらせられることを表しているのです。

觀音様は衆生濟度の慈悲の象徴で、蓮台を兩手で捧げてゐるのは、往生人をこの蓮台に乗せて佛のみ國へ誘い導いてやらうというお姿であつて、慈悲は救ひを求める衆生にとつては直接の手掛りとなり結びつきとなるものであります。従つて觀音様の慈悲だけが特別に取り出されて信仰の對象となることは極めて多いのです。阿彌陀様よりは觀音様の方がとりつき易い、直接に縁を結び易

いという心持からであります。もう一方の菩薩である勢至様は智慧の象徴であるから、それだけが切り離されて信仰の對象となることは、特別の場合の他は、殆んどないといつてもよい。智慧は冷徹であり、澄明であり、時には峻嚴でさえもあるからであります。しかし慈悲だけを取り出してこれが佛の力のすべてであると考え、は、却つて慈悲を誤りその眞の姿を失うものであります。

佛の内證と外用、すなわち悟りと力は四智、十力、四無畏、三十二相、八十種好その他様々の言葉で表現されます。經典の殆んどすべてはこの悟りの内容とそれに至る道を説き示したものであるから、これを表現するためには、恐らくどんな言ひ表し方も十分ではないであろうし、またありとあらゆる言葉が用ひられたであらう。しかし結局は佛の悟りとか力とかをつづめていえば、悲

智圓滿、慈悲と智慧とが渾然として融和して一體となつてゐるということでありまして、内證の面からいへば慈悲として發動しようとする智慧でありますし、外用の方からいへば智慧の磨きをかけられた慈悲であります。内證とは上求菩提という言葉で示されているように、向上の道、こちらからの方向において達せられる状態で、釋尊にしてみれば佛陀となられるまでの修行において漸次に到達される境地でありますし、阿彌陀佛にしてみれば菩薩としての因位の行願であります。外用というのは下化衆生すなわち向下の道、あちらからの方向において働きかけてくる救ひの働きで、一本願力による衆生救済であります。前のは往相であり、後のは還相であります。慈悲は必ず智慧に裏づけられていなければならないのです。

さて慈悲とは何でしょうか。私どもが佛を仰ぎ佛力に信順してゐるときには、強く佛の慈悲が表面に表れて、大慈悲の佛として仰がれるのであります。けれども慈悲という言葉、特に悲という字には今の感覚からいつてピッタリしないものがあるかもしれない。何處か一段と高い所から特別の志をもつて哀れみを垂れてくれるというような、封建的な臭いさえ伴ひがちであります。若い感覚

からいへば慈悲でなく慈愛とでも言いたいところです。いや、もつと端的に愛といつてはどうでしょう。佛の愛しかしそういうのには相當の危険が伏在していることを豫め知らなければなりません。というのは愛は愛欲であつて慈愛でないことが多いからであります。愛欲はこれとは目をつけたもの、欲しいと狙つたものを、手に入れて自分の廻りに掻き集めて、自分を肥やし自分を擴げようとする欲望であつて、何事においても私を中心になります。自分の生きるためには他の如何なるものを犠牲にしても敢えて意としない。愛は惜しみなく奪うのであります。飽くことをしらない自己の生命欲であります。ところが私が自己肯定をやつて他を否定しようとするように、他人もまた自己主張をやつて他を奪い取ろうとします。そこで必然に展開されるものは鬭争であります。また愛は盲目であります。愛は時に手段を選びません。愛する、慈しむ、思いやる、ということの底には、大方は自己の要求が覆い藏されていて、無條件的であることは殆んどない。母の子に對する愛情は、よく佛の慈悲心に譬えられます。誠に母の子に對する愛は、自分の一切を犠牲にして子のために捧げてやつて、少しも悔ゆる所な

いでありましよう。その子が身體弱く、性質歪み、能力の劣つた子であればあるほど、佛の衆生に對する慈悲がそうである如く、母の愛もいよいよ純粹に、いよいよ深厚になるでしよう。しかし一度、向きを換えて他人の子に對するとき、他人の子と自分の子とが比較されたり競い合つたりするとき、母は正見を失いその愛は曇り盲目となり方向に迷います。人間の愛は、そのままでは所詮愛欲であつて慈愛ではないからであります。

慈悲は智慧の磨きをかけられた愛であります。智慧とは知識ではありません。智慧を得るというのは物識りになることでは決してありません。物識りになる、知識を獲るのは、たとえ手を拱いていても、知性だけの働きによつて私の外なる客觀の事實を知ればよいのです。しかし智慧はそれでは得られません。それは私の在り方についての認識です。私のありのままの姿についての反省であり自覺であるのです。私のありのままの姿は空無であるということの自覺です。ですから、それは私を個別的な實體と考へる常識を打ち破つていくところに開かれてくるのです。「私」を打ち破つて突き抜けていくときに、深められていくのが智慧ですから、智慧は知性だけによ

つて獲られた觀念的な結果ではなく、私全體の實踐行動です。私というものの全體を根柢からゆすりゆるがして遂にはこれを覆えす働きであります。さきに愛欲は私を守つてその周圍に數々の物を掻き集めて、これを堅固にし擴大しようとする述べましたが、智慧は全くそれと反對の方向を辿ります。それは私を破壊し否定し續けていくのであつて、惜しみなくすべてを與えてしまひますが、しかしこうした自己否定をなしつつ、逆に、あらゆる物の中に、あらゆる人の懷に、生きることなのであります。自己の絶對の否定がただちに一段と高められた自己の肯定であるのです。佛の慈悲は、上求菩提の向上の道において、苦難に満ちた菩薩行としての智慧によつて裏づけられています。智慧が向下の方向を辿つて發動するとき慈悲となるのです。捨身に裏づけられた慈悲こそ大慈悲の名に値します。

佛に上への道と下への道とあるように、人間にもこの二つの方向があります。往相と還相との相反する二方向が私どもの目々に夜々に歩まれている道です。人はその家庭や環境に始まつて、段々にその圓周を擴げて、熱い慈愛をもつて働きかけねばならないが、常にそれは冷い智慧の批判を受けていよいよ清純となります。この二方向の統一は宗教だけの持つ妙用であります。



父と海亀

村田嘉久子

私の家は北品川にあつて、父は酒問屋を営んでいました。幼い頃のことを思ひ出すと、いろいろ懐かしいことばかりですが、秋が深くなつて夜が長くなると、よく家の佛間で百萬遍念佛會がつとめられました。家の佛間は小さいお寺の本堂ぐらゐもあつて、そこへ、父が親しくおつきあいしていた和尚さん達が来てくださつて、皆で一しよに、輪になつて大きな珠の數珠を廻しました。眞ん中に和尚さんが坐つて、鉦をたたいて大きい聲でお念佛を唱へると皆もそれに和して大聲でお念佛を唱へます。お念佛の一區切りになつたとき、自分の前に丁度運よく數珠の親珠が來ると、お菓子を頂けるので、小供達は大聲きをして、自分のところへその親珠をもつてこようとして、はしやぐのでした。

×

或る日、お店に出入りしている漁師達が、威勢のいい格好をして、五六人で荷車に何かを積んで店の前へ引いてきました。みると、疊一疊もあらうとかと思はれるほどに大きな正覺坊でした。その頃、私の家のすぐ先は海で、漁師達は珍らしいものが取れると、こうして店へ持つてくるのでした。この邊では正覺坊の取れることなどは珍らしいので、近所近邊の大騒ぎでした。父は何がしかのお金をやつてこの正覺坊を買ひ取りました。そして硯と筆を持つてこさせたので、何をするのかと不審に思つて見えていますと、龜の甲に乗つかつて、大きな字で南無阿彌陀佛と六字のお名號を書いてやつて、

「サア、お前をもう一度海へ放してやるから、この次の世には畜生などに生れず、お念佛の功德で、極樂へ生れるのだぞ。」そういつて正覺坊に澤山のお酒を吞ませてやりました。そして私や弟の頭を撫でて、

葬式つれづれ

信 常

しめやかな讀經も済んで、ひとわたり焼香も終り、歸るべき人は座を立つて行く。ひとしきりのザワザワした空氣が靜まると、海の底の様にシンとしてしまふのが通夜の席のひとときとして必ずある。そんな時は、片隅から、それも遠路はせつけた他の國に住む親戚の人などから、往々にして話し出されるのがそれぞれの「くにぶり」即ち習慣である。「私の郷里などではお通夜のことをヨヅメといひますが……」などと切り出される。

死といふこと、葬儀といふこと、これは何といつても人生にとつては一番大切な事柄であり、それ丈けにそのやり方やしきたりには土地土地で細心の注意が拂はれてゐる。「葬いどめの逆さ塔婆」だとか、「葬式歸りの白」だとか、一寸判斷のつかぬような奇習が今日も尙守られてゐる。いや、それを行つてゐる土地の人にとつては奇習どころか、葬儀次第の中で缺くことの出來ぬ重大な一つと考えられてゐるのである。

「とむらいどめの逆さ塔婆」これはひろく各地に見られる習俗で、子供をついで二人も

「こうしてにがしてやると、龜は恩を忘れずに、お前達の幸せになるように、丈夫になるように、恩返へしをしてくれるよ。」

といいました。父は漁師達に、

「必ず沖まで持つていつて放してやつておくれよ。見世物師などに賣飛してはいけないよ。」と懇々といいかせていました。やがて漁師達は龜を車に乗せて、賑やかに海邊の方へひいていきました。

x

こういう念佛信仰に生きていた父の感化で、私も幼い頃から、佛様に手を合はすこと、お念佛を唱へることを教へ込まれていました。そのお蔭で佛様のお救ひの力、大慈悲の力を深く信ずるようになったのです。

私が十九の年に、父は一週間ほどの患いで、ついに亡くなりましたが、私から申すのもいがかかと思ひますが、その臨終は實に安らかで、何處か楽しい所へでもゆくようでした。佛様がお迎えにみえるなどと申しまして、本當にその氣持らしく、如何にも楽しさうでした。その時、私の弟が側から、

「お父ちゃん、いつかの大きな龜に乗つて龍宮のような所へゆくのかもしれないね。」

とささやきました。本當に落着いた靜かな氣持、死んでゆくということとは、悲しいことには違いありませんが、しかしいかにも安らかな、臨終でした。

また數年前、空襲の激しい最中に、長い病氣の後、母もまた安らかな往生を遂げました。母も父と同様に、日課のお念佛を勵んでいました。こうして父のこと、母のことを考へますと、私は信仰の力がいかに強いものであるかに驚かずにはいられません。そして心から佛を念じて南無阿彌陀佛を唱へるようになりました。

私は母の亡くなつたのち、とうとう意を決して佛門に入りました。終戦直後のあの焼野ケ

三人も亡くした親などが、もうこれ以上とられたのでは玉なしだとばかり、何とかしてとられぬようにと、逆木の塔婆を作つてこれを墓地に立て、これ以上葬ひは御免だといふことにする。

「葬式がえりの白。」これは關東から東北にかけて、東京近在では淺川を中心とする一帯、岩手の栗石地方、佐渡、高知の長岡にも見られる。葬式から歸つて、自分の家に入る際、門口又は縁先に出されてある白に腰をかけて足を洗ふ。白のない家又は何かの都合で之を出さぬ場合には、半紙に白を畫いて縁先に置き、その上に腰をおろして足を洗ふ。

何故なのだらう、といふのが先づ話題にのぼるだらうが、これは白といふものが餅を造るものだからである。餅は非常に神聖な、神さまの食べ物、従つてそれを造る白も當然清淨なもの。だから葬式に列席して死穢に汚れたものは、そのまま家に入つて家の中を汚さぬよう、清淨な白の靈力によつてそのけがれを拂ふのだ、といふわけなのだが、底をわればつまらぬ理由だが、これを眞面目に行ふ人又その理由を知らずに眺める人にとつては極めてかわりのあることなのである。

葬式に關聯して、葬式の方言についてみるこれは讀者の方々それぞれのお國でも色々に、

原に立つたときには、何もかも一切を捨ててみ佛のみ胸にすがるより他に道はなかつたのでございます。宗脈戒脈を授かり、法名も覺心尼と改めて、吉永の門流を掬む一人の尼となりました。

x

世の中がだんだん深刻になつてまいりますにつれて、佛の大きな力に護られて、心安らかに、明るく楽しく、自分の信仰も深まり、人のためにも役に立ち、和やかに暮したいと考へます。法然上人のお歌に、

月かげの至らぬ里はなけれども

眺むる人の心にぞすむ

とゆうのがありますが、これは私の大好きなお歌です。本當に月は明るく美しく、何もかも照しておりましても、それは眺める人によつて、いろいろに見えるでしょう。心の曇つた人には、やはり月も曇つて見えましようし、心の盲しい人には月は全く見えないでしょう。どうかして私は明るい美しい月を、いつでも、どこにいても、眺めて暮したいものと願つております。

中村 辨 康 著 法然上人とその信仰

菊半截八十頁
定價三十圓
送料五圓
十部以上一割引

少くとも科學に抵觸するやうな信仰に永遠性はない。然も科學以上のものでなくては宗教でないことは明瞭である。法然上人の宗教は人間性に目醒め、人間のドン底から立上つた信仰であるから、科學以上のものであつて然かも、極めて常識的である。この意味に於て最も現代に相應しい信仰であり、各宗各派を問はず一應この信仰を研究する必要があると思ふ。敢て之の書を一般に推奨する所以である。

東京都港区芝公園五ノ一〇

發行所

法然上人鑽仰會

發行所振替東京八二一八七番

いつてゐるだろうが、大體三つの系統に分けられる。即ち東北から關東のヂャンボン系、關東一帯のトムライ系、東北を中心とし、中國にも少し見られるソウレイ系という三つである。第一ジャンボン系というのは、これ又少々の訛りはあるが大體ザランボン(山形)ヂャランボン(千葉)ジャンボン(秋田)などといふたぐいである。次のトムライ系は相州のオトブレ、甲斐のオトモライ、埼玉縣北足立のトムレイといった類が、それが漢音化してオソレン(山形)ソーライ(越後)ソーレイ(和歌山)となると第三のソウレイ系になるわけである。いふまでもなく、第一のものは葬式に伴ふ音響から出たもので、ドラ、メウハチといったたぐいの樂器の音に基いてゐる。トムライ、ソウレイは「葬い」「葬禮」から來たものである。

この外に、伊豆大島のオフリ(送り)滋賀縣伊香郡のシキヤウ(死去)肥前のノベ(野邊)など極めて具體的なものもあるが、埼玉縣幸手町のアブカンに至つては、土地の人でも何故さういふのか分らないだらう。一説には「油揚げのお菜で飯をたべてから棺を出すからアブカンだ」とあるが、正に珍説であり、珍語といふべきだろう。

とに角、このやうな言葉のニャンスには、先祖傳來何百年とこれを守りつゞけて來た人々の素直な思惟が匂つており、又その土地の生活に一つになつてうけつがれてゐる葬式ひいては佛教、これこそが何といつても吾々の佛教信仰の底力になつてゐるといえるだらう。

石田一鼎 餞別狀 (一)

吉田 絃 二 郎

葉隱の生みの親石田一鼎が、同じ藩中の中野武左衛門に與へた餞別狀がある。貞享二年九月九日の日附になつてゐる。武左衛門は中野宗三の四男で、この手紙を贈られたころは十八九歳の若者であつたらしい。この度父宗三が藩主のお伴をして江戸に向つて發足するに際し、武左衛門は父に隨從して初めて旅立つのである。それについて一鼎は道中の嗜みを説いて餞けの辭としてゐるが、その文面を見ると當時いかに神佛を尊崇することが、第一義的なこととして考へられてゐたかゞうかゞはれる。この手紙は「石田一鼎餞別狀」として、寫本として殘されてゐるものであるが、今日の人にとりても教へるところが多いと思ふので一部分を紹介することにした。

「今度御親父宗三老江戸御供被仰付候。就者貴様若年に御座候得共、江戸江可有御越と御はまり一段可然存候。御志さへ堅固に候へば隨分供被成尤に候。若江戸見物の御内存少も御座候はゞ曾而不可然候。」父に同伴して江戸へ下るのであるが、それは奉公のためであり、重い任務を負うてのことである。もし江戸見物を楽しまうなどの考へが、いさゝかでも内心にあるとしたら、ゆるしがたきことであると戒めてゐる。江戸見物を心に抱いての江戸下りでは武士の道は立たない。今の世にもこれに似た役人達の出張旅行といふものがある。

「老人の儀に候へばかたみにと存候而書付致進入候。切々御覽候而、天理之當然と、一人の私心と、冥加に預ると、御罰を蒙るとの分別肝要に候。」

一鼎はこの時五十七歳であつた。それゆゑ「老人の儀に候へばかたみ」と思つてこの手紙をしたゝめたのである。この手紙の中でかれは人間の生活はすべて天理に従ひ、私心を去るべきこと、天地神明の加護に生き、神佛の御罰を畏るべきことをさとしてゐる。今日わたくしたちの生活は天理に背き、私心に生きることのみが多く、神佛の御罰を畏るゝことを忘れてゐる。

「(宗三老)此節は決定にて身を抛、御請申上たる由物語に候。誠に御當介之至極感入申候。然時は必死之覺悟を以て戰場に出立申と同然之事に候。貴様年若に候得共必死之戰場に供可被成と思召立候はゞ天理之當然、孝心之發動と申物に候。云々」

は御尊父宗三老にはこの度死を覺悟で江戸下りをお請けした。附き添ひの子も亦死を覺悟でなければならぬ。中野宗三父子の江戸下りはたとへば佛道修行者の忍苦精進であつた。それゆゑに供揃へ、旅装のごときも佛者の墨染の衣に一鉢一笠に比すべきものであつた。

「衣裳其外旅道具御好又は乗懸道具など御揃候はゞ遊山之出立と申物にて候。」旅道具に好みを見せ、驛馬乗懸けの道具など派手に揃へての旅ならば物見遊山と申すべく修行の旅、奉公の旅とは言へない。「ざうり取ところぞ申度候得共、小姓通りに被成候て、道中陸にて駕籠につき供可然候。足痛歩行難成時はからしりにて泊迄御越可有之候」

本來ならば草履取りの役目も致す心がけでなければならぬが、父の駕籠脇に供して小姓並みに仕へて行けと教へたものである。道中足が痛んだら夜の泊りまでからしり馬に乗つて行け、決して立派な鞍を置いた馬などに乗るなと説く。からしりは輕尻とも書き、荷を卸した驛路の駄馬のことである。

「江戸上方にて誰人すゝめ申候共、見物事ふつと仕間敷と御誓願可然候。なぐさみは若き時之物と人ごとに申候。乍然能案じ候へば、若時あやまち惡事出來候而より、身上仕立申事不罷成候。」

江戸出仕がこのたびの旅行の大眼目であれば、見物事ふつと仕るまじく御誓願可然と言つて御誓願と

いふ文字を使つてゐる。神佛への誓願をいつも忘れぬところに、一鼎の信仰心のほどが察せられる。「なぐさみは若き時の物と人ごとに申候」これは今も昔もかはらぬ人の言ひ草である。殊に敗戦後の若い人々の心情である。しかし一鼎も説いてゐるやうに青春時の一步の誤りはやがて千里の誤りとなり、終に挽回の策なきこととなる。今日の刹那主義的生活に耽る人たちにとつて頂門の一針である。「只今死すると存候時何事の慰が面白く可有之哉。孝行の爲に只今死するとはまり候へば何事も心にかゝる事無之候。佐嘉打立之時決定死すと思切候て、宗三老江戸往來無事に被罷歸候様に氏神守神に眞實の立願可被成候云々」

この度の旅行へ出立する第一步から身は無きものと覺悟した以上、何の慰み物を見ても面白いなどと感ずる道理がない。この事は學問修行の身にとつても同じことである。佐嘉は今の佐賀である。氏神、守護神に眞實の立願をこめよといふところにひたむきな信仰心がうかゞはれる。

さらに一鼎は以上の教戒を三ヶ條に要約して

一、道中歩行之義、力之及精を出し、不能成所にてはからしり馬可被差免事

一、江戸往來共に私の遊山見物仕間敷候云々

一、日夜共に親に付副候而一人にて奉公仕と存可相調候云々

と書いてゐる。一人にて奉公といふ心がけがたい。草履取りも小姓も若黨も頼みはせず、己れ一人のつもりにて親への奉公をつとめるといふ意味である。

「右之條々若於違犯は可蒙御罰之間、心之及相守申候。毎朝日天に向つて、心經を讀拜いたし、懈怠仕間敷候。依而誓願如件。云々」

旅行中の一日一日は即ち佛神天理の加護の裡に在ることを信じ、一切を佛神に委ね、朝毎に心經を讀誦する敬虔な修行者の心がけに生きよと説くのである。

芝園だより

◇生み出すことは苦しみ、生れ出ることは喜び、つくづくと編集をしながら感じる。この苦しみと喜びのあざなうところに浄土の道が拓かれてゆく。

◇硬いぞ、硬いぞとおもいながら硬くなつて氣張つてゐる。そこがまた正直なところだと暫らく成長を見守つて下さい。十数年の浄土

のもつ傳統と調子とを、新しい形質で生かすことに苦心している。

◇それにしても前號印刷のミス・吉田先生にお詫び申し上げます。校正の周密、印刷の正確は内容の充實と表裏せねばならないと充分覺悟しています。正確に、迅速にこれは鐵道標語ではなく、今の編集室の目標。

◇本號は新たに村田かく子さんの心を温くする信仰談を頂いた。村

田さんは古く帝劇草分けの名女優で御なじみの方、いまは靜かに信仰の道におすゝです。村田さんのそおした歩みに好き機縁を與えられた佐藤賢順先生は大正大學教授本號に御専門の立場から淳々と説いて頂くことが出來たのも嬉しい。中村先生は東大前教授。

◇内閣も變る。秋深い窓に、青い夜の光の中で「浄土」を想う。全てを超えてゆく一筋の路が目に見え。(譯田)

お先棒のまたの名を提燈持ちといひますが、闇夜の提燈持はなかなかむづかしい。案内される人は行く先を知らないし、足許に不馴れですから、案内する人は提燈でその足許を明かるくしてやり乍ら一歩々々その人を目的地に導いてやらなくてはなりません。若し案内する人が、はるか後の方からのそ／＼ついて行つたり、またあべこべにはるか先の方をすた／＼

行つてしまつたらどうでせう。

闇夜のよき提燈持ち——本誌もこれと同じ使命をもつてゐるのです。人々は何と云つても環境に支配されます。したがつてめまぐるしい變動のこの十年と云ふ年月が筆で記し得ないほど、生活環境の激變を起しその激變でむろん人々の要求するものにも大きな異りを見せてゐます。

従つて、今の人々は一體何を希ひ求めてゐるか、これが私共編集者の最大の關心事です。これを知ることが、闇夜のよき案内者としての本誌にとつては、目前の急務です。そしてともかくもつねに、唯一歩だけ先に歩みたいと希つてゐます。

こんなところに本誌編集の苦勞があるのです。皆さんから、その希ひ求めてゐるものが何であるか卒直に聴せていただければ結構だと思ひます。(吉田宣成)

「浄土」 十月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和廿三年十月二十日印刷

昭和廿三年十一月一日發行

(定價拾圓)

東京都港區芝公園五號地十番

編集兼 眞野 正 順
發行人

東京都千代田區神保町三ノ二

印刷人 春山治部左衛門

東京都千代田區神保町三ノ二

印刷所 共立社印刷所

配給元

東京都千代田區淺路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京都港區芝公園五號地十番

振替東京八二一八七番

會員番B一〇八〇一四

會費 金 百四十四圓
一ヶ年

(送料を含む)

振替振込みは手数料一圓五十錢増のこと

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十三年十月廿日印刷本 昭和二十三年十一月一日發行

浄土 第十四卷 第七號

定價金 拾圓(送料)